

飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

第 426 回 「長寿の祝い」とはなにぞぞ！

2011.7.3

イケケン先生、明日(7月4日)で満60歳、いわゆる還暦だそうだ。還暦とは再び生まれた年の干支に還(かえ)るという意味で、本卦還(ほんけがえり)とも言うらしい。その還暦を迎えた人の長寿のお祝いをするのが、日本の古来からの俗習のようである。

まだまだ負けんぞ！と意気張っているイケケン先生、この「長寿の祝い」には、若干御冠(おかんむり)のようだ。現代では、男性の平均寿命が79歳、女性は86歳でどちらも世界トップクラスの長寿。また65歳定年制の会社も増えていて、60歳はまだまだ元気で現役で活躍している。確かに「長寿の祝い」というのは少々違和感があるようだ。

実は、この平均寿命、日本人が先進国トップレベルに躍り出たのは1970年代以降で、つい最近のことだ。太平洋戦争以前の平均寿命は、男女とも50歳以下だった。ちなみにイケケン先生が生まれた昭和26年(1951年)に始めて、平均寿命が男女とも60歳を超えた。(男60.8歳、女64.9歳～厚生労働省「簡易生命表」)

いよいよ面白くなってきたので、もう少し平均寿命の歴史を調べてみた。紀元前11世紀の「縄文時代」、日本人の寿命は、男女とも14.6歳だったそうである。「縄文時代」は、約1万年の幅を持っているが、その間、死亡率は、改善されず、「弥生時代」(紀元前8世紀～紀元3世紀)、「古墳時代」(3世紀～7世紀)に入っても、「縄文時代」と、ほとんど変わることはなかったようである。今の感覚でいえば、大人になる前に皆いなくなった、中学生の子供ばかりの世の中なんて、信じようがない。

平安時代の寿命は、男性で32歳位、女性で27歳位とのデータがある。あの耽美で優麗で、エロチックな最高傑作「源氏物語」の登場人物達は、心身ともに絶好調な10～20歳代の若者だった。以降、江戸時代くらいまでの平均寿命は、20～30歳を越えないあたり、ということらしい。40歳はかなりの高齢として珍しい例だったに違いない。

しかし、恵まれた階級、高僧は、長寿のようだ。歴史上の人物を比較すると、「戦国時代60.4歳」「江戸時代前期67.7歳」「江戸時代後期65.2歳」と、さすが、歴史上の人物、「長生き」な人が多いようである。食事や住環境が、大きな要素と推測されるが、ほとんどの一般庶民は常に栄養失調状態だったようで、乳幼児の死亡率が高い。明治13(1880)年、男36歳 女38歳、大正10～14(1921～24)年 男42歳 女43.2歳。そして文字通り「人生50年」になったのは昭和22(1947)年(男50歳 女53.9歳)。第二次世界大戦終了の2年後、今から、わずか64年ほど前のことだ。

還暦を「長寿の祝い」とするのはこの時代まで。現状の我国は、60歳以上の人口は全体の約30%である。子ども(15歳未満)の数が13.2%しかないのに、おじいちゃん、おばあちゃんはその2.3倍もいる。60歳の還暦は、おじいちゃん初年兵、今はまだまだ「漬垂(はなた)れ小僧」、お元気な諸先輩高齢者からそう、叱られそうである。